産科における外国人患者受入れのポイント

目次

01　外国人の親をもつ子どもの増加

02　産科における外国人患者対応のポイント：3つの違いを理解すること

03　出産に関する文化・習慣・制度の違い①　妊娠中

04　出産に関する文化・習慣・制度の違い②　出産方法

05　出産に関する文化・習慣・制度の違い③-1　出産後

06　出産に関する文化・習慣・制度の違い③-2　出産後

07　【補足】入院に関する文化の違い

08　言語の違いへの対策① 各種文書や資料の多言語化

09　言語の違いへの対策② 医療通訳の利用

10　医療現場における説明の場面で困る事例

11　産科で便利に使える医療通訳 i. 予約・3者間通話

12　産科で便利に使える医療通訳 ii. 入電対応

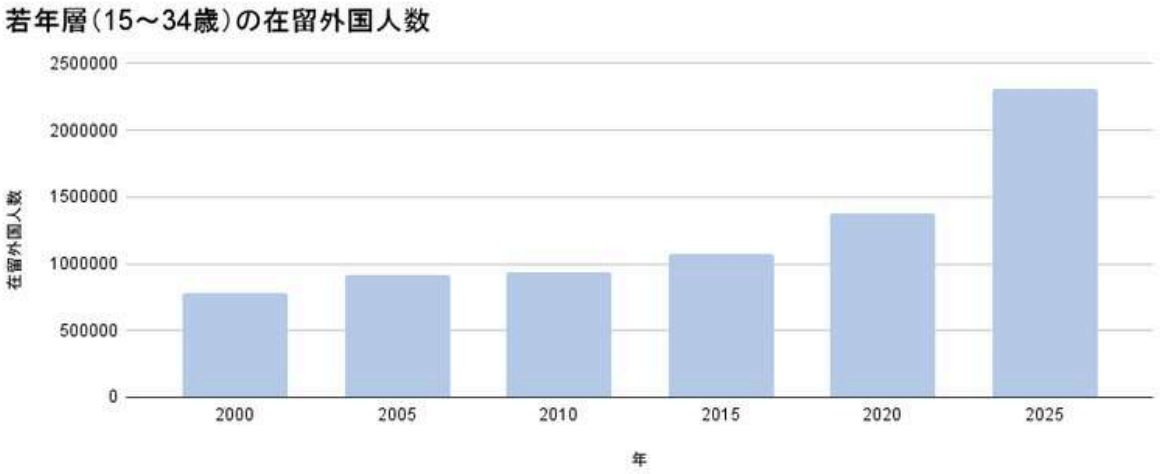
13　産科の外国人対応ならメディフォン

外国人の親をもつ子どもの増加

厚生労働省の調査データによると、2023年に日本で生まれた子ども727,277人のうち、父母の少なくとも一方が外国人である子どもは35,465人でした。
出生数全体が減少するなかで、外国にルーツを持つ子どもの割合は約4.9%（約20人に1人）まで上昇しています。今や小児科の待合室や健診の現場において、外国人の親をもつ子どもは決して「珍しい存在」ではなく、日常的な風景となっています。

今後日本での外国人の出産は増える？

在留外国人の統計をみると、若年層（15~34歳）は2015年からの10年間で2倍以上に増加しており、今後外国人の出産が増えていくと予想されます。



参考：出入国在留管理庁「在留外国人統計（旧登録外国人統計）統計表」（https://www.moj.go.jp/isa/policies/statistics/toukei_ichiran_touroku.html）

産科における外国人患者対応のポイント：3つの違いを理解すること

言語の違い

自分の話したことが正確に伝わっているかが分からない状態でやりとりをすると、もしお互いの想定通りに進まずにトラブルとなった場合大きなリスクを抱えることにもなります。

文化の違い

妊娠・出産に関する**習慣・風習は伝統的な文化の影響**を色濃く受けている傾向にあり、国によって大きな違いが出る分野です。

制度の違い

出産や出産後の育児を支援する制度は様々な国で整備されていますが、国によってその内実は様々です。
妊婦健診が一般的ではなかったり、日本よりはるかに頻度が低い国も少なくありません。

ツールの導入や文書の翻訳など、
多言語化を進めることが重要です

文化・制度の違いを理解して、知っておくことが重要です。
その上、事前に対応方法を決めておくと円滑な対応につながるでしょう。
（次ページから文化・制度の違いをご紹介します）

出産に関する文化・習慣・制度の違い①　妊娠中

	日本	海外（アジア）
妊婦の体重管理	**体重管理が厳しい** 体重の基準は2021年に引き上がりましたが、海外と比べるとまだ厳しいと言う人もいます。	アジアを中心に、日本よりも体重を増やすことが推奨されることも多いと言われています。
妊婦健診・検査	**高頻度・高い普及率** 日本では、妊娠発覚後、自治体に届出て母子手帳・妊婦健診の受診券をもらい、既定の頻度で健診を受けることが一般化しています。	アジアを中心に、**妊婦健診が周知されていない国も少なくありません。**そのため、健診を受けていない外国人妊婦が飛び込みで急に来院することもあります。
母子手帳	**日本発祥のもの** 妊娠6週～10週目頃に住民登録をしている市区町村の役所や医療機関などでもらうのが当たり前になっています。	世界50カ国以上で活用されており、アジアでは韓国、中国、タイ、ネパール、ベトナムなどが挙げられます。 とはいえ、**母子手帳の認知は日本ほど高くなく**、その**役割や意味が分からない方も少なくありません。**

出産に関する文化・習慣・制度の違い②　出産方法

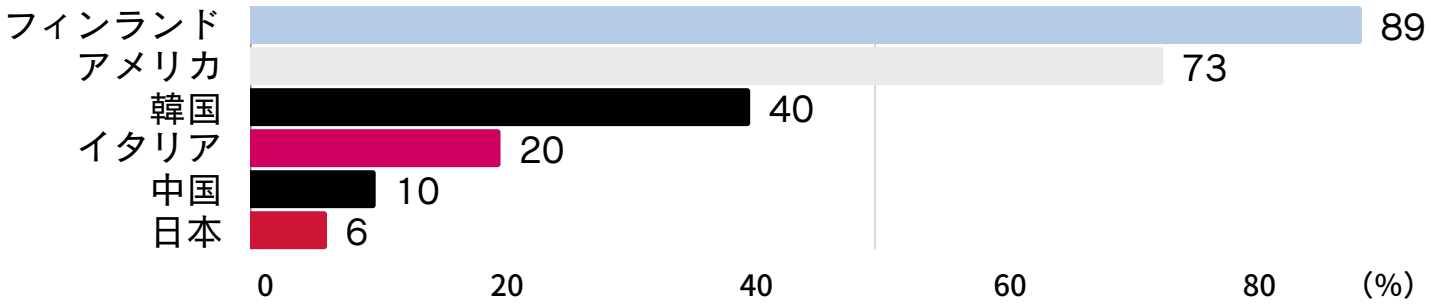
帝王切開が当たり前と考える人も

ブラジルでは帝王切開の実施率が半数以上と言われています。また、中国でも帝王切開の実施率が5割を超えている大都市も少なくないと言われています。帝王切開についての認識の違いから、外国人妊婦さんの対応が円滑に進まなくなるケースもあります。

無痛分娩が当たり前の国も

北米やヨーロッパでは硬膜外無痛分娩が積極的におこなわれています。アジアにおいても、韓国では無痛分娩を望む人の割合が少なくありません。欧米でも無痛分娩が当たり前ではない国もあるので、本人の意向を確認することが重要です。

無痛分娩の割合



参考：妊娠・出産の国際比較（聖心女子大学グローバル共生研究所）（https://kyosei.u-sacred-heart.ac.jp/exhibition/2022_women_4/chapter_02/）

出産に関する文化・習慣・制度の違い③-1　出産後

産後の入院日数の違い

日本の場合

- **自然分娩なら５日から１週間程度**
- **帝王切開なら１週間から10日程度**

日本では保健医療が充実しており、人口1,000人あたりの急性期病床数では、OECD平均の倍以上と加盟国内では突出して多いと言われています。そのため、軽症～中等症のベッド確保が比較的容易であることが、入院日数が長い一因と言われています。

アメリカの場合

- **最短24時間、通常は産後２日前後で退院**
- **帝王切開でも３、４日の入院期間で退院**

医療費が高く、保険で払われるのが２日であることが通常ということや、無痛分娩が７割以上という出産事情も理由として挙げられます。
※無痛分娩は出産後の体力回復が比較的早い傾向があると言われています。

早く退院したいと要望があった場合、
どのような対応・説明をするのか、あらかじめ決めておくとよいでしょう。

出産に関する文化・習慣・制度の違い③-2　出産後

韓国

産後3～4日で退院して産後調理院に移動し、約２週間以上過ごすことが一般的になっています。
産後調理院では、マッサージや身体によい食事、運動指導や育児についての指導などがおこなわれます。
また、ミネラルが豊富などという理由で、産後直後にわかめスープを飲むという習慣があります。

中国

産後の１か月の期間は「坐月子（ズオユエズ）」と呼ばれ、その期間は家を出たりシャワーを浴びたりすることが禁止される一方、授乳以外にはほとんど起き上がらずに過ごすという文化があります。

イスラーム

生まれた直後に赤ちゃんの左右の耳元で親が信仰の告白を唱えるのは極めて重要な儀式とされています。
なお、イスラーム教徒の義務である一日5回の礼拝などは、出産後の女性は免除されます。

※これらの風習は必ずしもすべての国民がおこなっているわけではありません。

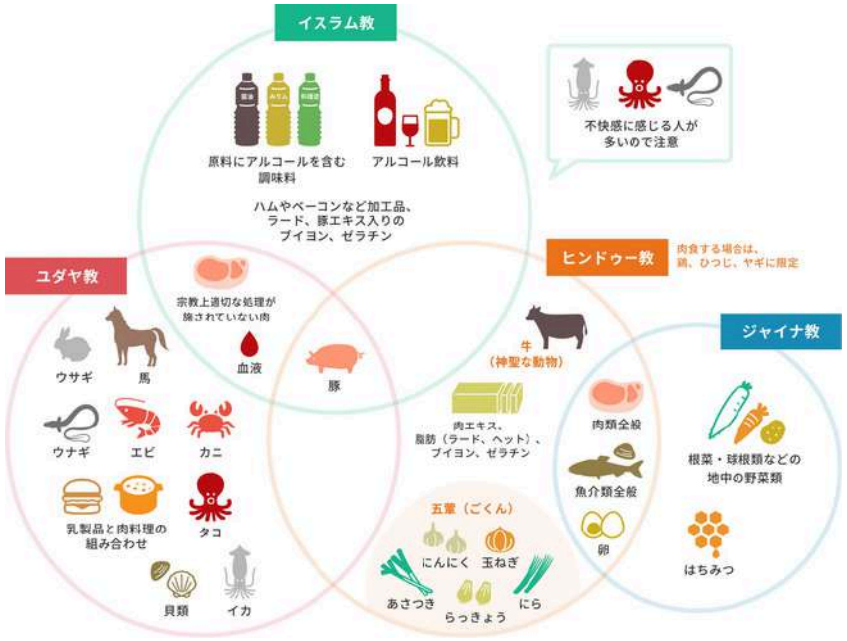
文化・習慣の違いへの対応のポイント

外国人患者の希望通りに全て対応することが異文化対応の目的ではありません。医療提供の阻害要因や医療安全上の問題点、他の患者に不快や不安を抱かせる要素について、医療機関としての対応を明確にすることが重要です。事前に要望を聞き出した上で、**患者・家族にできること・できないことを事前に明確に説明**すれば、大きなトラブルに発展するリスクを大幅に低減できるでしょう。

【補足】入院に関する文化の違い

食事について

宗教・信条的な理由で食べられないものがある方も少なくありません。対応できるものと対応できないものについてあらかじめルールを定め、入院前に要望を聞き、ルール通りに対応することが重要です。



引用：宗教上の禁忌食品（岐阜大学医学部附属病院国際医療センター）
（https://www.hosp.gifu-u.ac.jp/origin/imc/friendly-meals.html）

面会規則について

中南米やアジアなど家族の繋がりを重要視する国では、家族や親戚が入院すると、家族・親戚が大人数で面会に訪れるのが当たり前のため、日本の医療機関でも同じように大人数で面会にやってくることがあります。

東南アジアの一部の国では、入院中の患者の世話を家族あるいは雇われた世話人がおこなうことが一般的です。日本の医療機関でもそれが当たり前だと思って、家族が病棟に泊り込んで食事を用意しようとする可能性もあります。

言語の違いへの対策① 各種文書や資料の多言語化

入院案内の多言語化

海外と日本では入院に関するルールや文化において大きな違いがあります。そこで、あらかじめ入院説明の際に、入院に関するルールを齟齬なく伝えることが重要です。そのため、入院案内時に用いる説明資料を翻訳する医療機関が増えています。

また、入院時に事故が起きるリスクを防ぐため、避難経路や立ち入り禁止、熱湯注意などの表示を多言語化することも重要です。

出産後の説明や検査の多言語化

検査の説明や出産後の説明など、定型的な会話の場面では、あらかじめ話す内容を多言語化しておく医療機関が増えています。

また、場合によっては、無料で公開されている多言語ツールを活用するのも有効的です。外国人住民のための子育て支援サイト（公益財団法人かながわ国際交流財団）では、多言語ツールを無料で公開しています。

https://www.kifjp.org/child/

言語の違いへの対策② 医療通訳の利用

深刻な場面ではニュアンス
を理解して
意思疎通することが重要

医療文化・制度にも
精通した通訳者が
通訳すると対応が円滑に

手術の説明などの場面では
医療用語に精通した
通訳者が重要

医療通訳の準備が重要

［ 医療通訳＝**専門の教育を受けた**通訳者による通訳 ］

※医療通訳とは

語学力や通訳技術に加え医療に関する様々な知識を学んでいる医療専門の通訳者に依頼して通訳をしてもらうことです。難易度の高い医療用語などでも通訳することができ、誤訳などによるリスクを極力抑えることができます。 厚生労働省の「外国人患者の受入れのための医療機関向けマニュアル」では、円滑な医療の提供という理由だけではなく、医療安全の観点から医療通訳を使用することを推奨しています。

医療現場における説明の場面で困る事例

どのようなお産をしたいか知りたいが、
深い対話ができない。

産後うつのスクリーニングや毎日の回診で「大丈夫」という答えしか返ってこない…

相手が理解できたか分からず、産後の生活指導が一方通行になってしまう。

産科医療の現場では、診察だけでなく、膨大な「指導」と「確認」が発生します。

妊娠中	分娩中	産後
信頼関係を築くための対話	安全を守るための状況確認	命を繋ぐための 「授乳・育児指導」と「心のケア」

「なんとなく通じている」では、母子の安全と退院後の生活は守れません。
だからこそ、細かなニュアンスまで共有できる医療通訳が必要です。

産科で便利に使える医療通訳 ｉ. 予約・3者間通話

1

コーディネーター型の通訳サービスなら、予約ができて対応が円滑に

コールセンター型 → ランダムに通訳者につながる

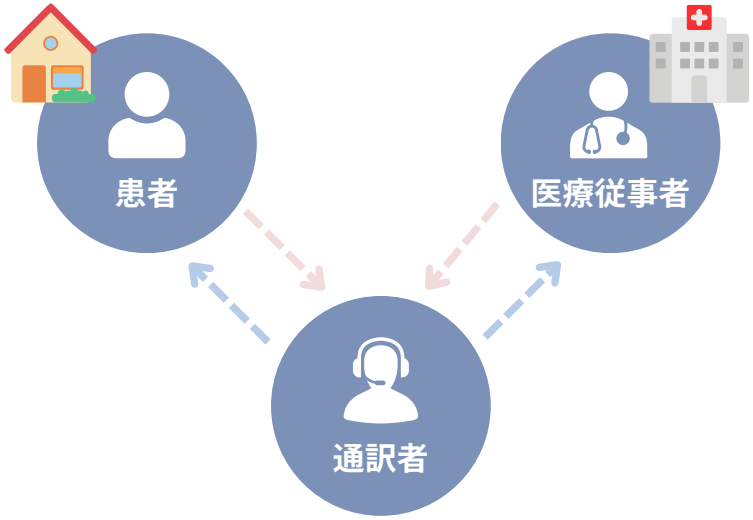
コールセンター＆コーディネーター型 → 特定の通訳者につなげることができる 予約が可能

①通院の場合、前と同じ通訳者を予約することで、通訳者がスムーズに通訳に入ることができるため、結果的に対応時間を短縮することができます。

②女性の通訳者を希望される妊婦さんも少なくありません。女性の通訳者を予約で確保することで、妊婦さんが安心でき、スムーズな診察につながるでしょう。

2

３者間通話ができると便利



遠方に住んでいるご家族へ状況説明が必要な際や、外国人妊婦さんが急変で医療機関に電話で連絡してきた際などに役立ちます。

産科で便利に使える医療通訳 ii. 入電対応

日本語以外の言語で電話がかかってくる
⇒電話スタッフの負担大

多言語入電対応サービスを導入する

1次対応を外注することで、院内スタッフの負担を減らし、本来業務に集中してもらいやすくなります

例）メディフォンの多言語入電対応サービスの場合

①HP上に、外国語での問い合わせ先情報の掲載

②外国人からの入電全てに対し、メディフォンが外国語で一次対応

③メディフォンは対応内容を医療機関様に報告します

産科の外国人対応ならメディフォン

医療に特化した [医療通訳] ＋ [機械翻訳] サービス

遠隔医療通訳

専門の通訳者による通訳が

32言語・24時間
利用可能

機械翻訳

医療現場に特化したAI翻訳が

最大107言語・24時間
利用可能

産科の外国人患者対応も安心

- ☑ 医療文化・習慣の違いを学んだ専門の医療通訳者に頼める
- ☑ 予約すれば、毎回同じ通訳者に頼めるので、同じ説明を繰り返さなくて済む
- ☑ 予約で通訳者の性別も指定できるので、患者さんにも安心いただけます